

三月八日は女の日だ

宮本百合子

青空文庫

モスクワじゆうが濡れたビードロ玉だ。きのうひどく寒かった。並木道の雪が再び凍つて子供連がスキーをかつぎ出した。ところへ今夜は零下五度の春の雨が盛にふつてゐる。どこもかしこもつるつるである。

黒くひかつてそこへ街の灯かけをうつす大都会、地球の六分の一を占める社会主義連邦の首府モスクワの春の泥水をしばいて電車はひどい勢で走っている。今夜は特別な日なんだ。三月八日は世界無産婦人デーである。各区の勤労者クラブでいろんな催しものがある。だから急がなけりやならない。

東南へ向つて駛る電車はしのどんづまりで日本女は車を降りた。三四人、赤い布ブラトクをかぶつた女も下りたが、忽ち散つてしまつて、日本女は自分の前に雨びしよびしの暗い交叉点、妙な空地、その端つこに線路工夫の小舎らしい一つの黄色い貨車を見た。その屋根でラジオのアンテナが濡れながら光っている。空地の濡れた細い樹の幹も光っている。あつちを見ると真黒い空の下で大きな白文字が、

K O M Y H A P

外套の襟を立てて労働者がやつてきた。日本女は自分の立つてるところから大きな声で

呼びかけた。

——タワ—リシチ！　クフミンストルヴ倶楽部ってどこだか知りませんか？

——その空地を突切ってずつと行つて三つめの横丁を左に入ると橋がある、その先だ。

——チヨールト畜生！

警笛を鳴らさずかたつぽのヘッド・ライトをぼんやりつけたトラックがとんできた。

日本女は、寂しい歩道をととき横に並んでる家の羽目へ左手をつつぱりながら歩いて行つた。本当は新しい防寒靴ガローシをもうとつくに買わなければならない筈なんだ。底でゴムの疣いぼが減つちまつたら、こんな夜歩けるものじゃない。

橋へ出た。木の陸橋だ。下を鉄道線路が通っている。前を三人若いコムソモルカらしい労働婦人が足を揃え、雨をかまわず熱心にしゃべりながら歩いて行く。こんなことを云つてる。

——馬鹿なのよ！　あいつ！

——馬鹿つて云うより、無自覚だ。だって、もうあの職場じゃ九十五パーセント突撃ウダール隊じゃないか！

ソヴェトのプロレタリアートは雨傘なんてなしで「十月」^{オクチャープリ}をやりとげた。一九三〇年、モスクワの群集中にある一本の女持雨傘は、或る時コーチクの外套^{シュールバ}ぐらい階級性を帯びるのだ。

歩道の上でかたまってる人影が見え出した。鞞防寒帽子の耳覆いを、赤い頬つぺたの横でフラフラさせた男の子が日本女をつかまえてきいた。

——切符もってない？

又一寸行くと、

——余分な切符もってませんか？

巴里コンミューンの記念祭の夜、ルイコフの名によるクラブへ行ったときも、クラブの入口にいくたりも主に青年がかたまつて、来る者ごとに訊いていた。特別な催しがあるとキモスクワのクラブでは入場券がいるのだ。

車寄から劇場そっくりにくつもの厚い硝子扉が並んでいる。日本女は体じゅうの重みをかけそれを押して入った。バング！

ほ、暖い！

外套ぬぎ場があつちとこつちの端にある大きい広間^{ザール}は人で一杯だ。さっぱりしたオカッ

パの頸へ赤い襟飾をかけたピオニエル少女。手に何かプリントをもつてその少女と話してる年長のピオニエル少年。芝居行の靴下をはき、オカッパの上へセルロイド櫛をさした若い細君が、時々気にしては新しい藤色フランス縮緬の襟飾に手をやりながら、紺のトルストフカの亭主によりそつて四辺を見まわしつつ散歩している。

『905』 日本女の受けとつた外套防寒靴預番号の真鍮札。

外にあんな雨と暗い道があるとは思われぬ。

絶えず人が登り降りしている大階段を日本女は二階へあがって行つた。

とつつきが国防科学協会オソアピアヒムの研究室だ。壁にかかつてる毒ガス演習の実写、飛行機図解、

銃器図解の前へ数人若い男女がかたまつて案内の豆電燈をつけたり消したりしているのが見える。「帝国主義トファツシズムニ対抗セヨ!!」赤いプラカード。

戸のしまった種々な研究室が並んでる。が、日本女はモスクワ一大きい鉄道従業員組合のクラブで、今廊下の見学してはられないんだ。監督を見つけ出さなければならぬ。今夜の催しのために、彼女のところにあるのは切符ではない一枚の紙つきれで、その紙つきれは絶対にこのクラブの監督を必要とするのである。

ひどく広い。そこを歩いてゆくとだんだん通路が爪先あがりになっていくみたいだ。一

定の方向をむいてあんまり静肅にどっさり並んでいる人間の間をひとりだけ歩いているとそんな気になるのだ。

白い壁について煌々あたりを輝やかしているいくつもの電燈のカーボン線を震わすような女の声が、マイクロフォンをとおして金属的に反響している。

——このようにして、タワースチ！ 五カ年計画はソヴェト鑄鉄生産額を世界第三位に、石炭採掘量において世界第四位に進めるばかりではありません。全ソヴェトの生産に従事する勤労者の平均賃金は五カ年計画の終りににおいて七一パーセント増すだろう。国家
ブラン
計画部は……

樺色の上着の肩で音波を切りながらドンドン歩いて行つて監督は赤布で飾られた舞台のすぐ下第一列へ日本女を待たせ、わきの扉の方から椅子をもつて来てくれた。

こんなに遅れて来たのは日本女ひとりである。舞台の赤布をかけた長テーブルの中央に、ニッケル・ベルを前にして、もう相当年配の静かな横顔の女議長がうつむいて何か書きつけている。左右、うしろ側の椅子に並んでるのも八割は黨員らしい女だ。テーブルの端つこで速記してるコムソモールカがある。レーニンの石膏像。赤いプラカートは二階バルコンの手すりからも張りまわされている。正面には燃えるようなプラカート「第十回世界無

産婦人デー万歳！ レーニズムの旗の下に五カ年計画を四年で！」棕櫚の大鉢が舞台の両端に置かれてある。

——電化による生産手段の発達は現在一日平均七・七一の労働時間を六・八六に短縮するであります。プロレタリアート新文化建設の一進展として、文部省は五カ年計画の終りには完全な国庫負担による四年制の国民教育を実施しようとしているのであります。飛び交う数字と一種名状すべからざる緊張した熱意で飽和している空気の中をそつと、一人の婦人党員が舞台から日本女のところへきた。彼女は日本女の耳に口をつけて云った。

——ようこそ！ どこからです？

——日本から。

囁きかえした。

——代表ですか？

——いいえ。

——舞台の上へいらつしやいな。もし演説して下さいと非常にいいんだが——
六七百人入っているのだ。

日本女は辞退した。婦人党員はわきにしゃがんで日本女の膝の上へ持ってたハギトリ帖

と鉛筆をのせた。

——では、どうぞ名と職業を書いて下さい。

彼女は、日本女が耳で演説をききながら下手な字で「日ヤポーニヤ本ビスアーチエリニツツア。作家、ユリ

・チュウジオ」と書くのを熱心に見ていたが、手帖をもつて立ち上りぎわ、低い声に力をこめて、

——ありがとう！

と云った。

あなたが今夜来られたのは満足です。

捲き上げるような拍手とインターナショナル第一節の奏樂が起った。演説が終ったのだ。演説者の小柄な婦人党员は水さしから一杯水のみ、鎌と槌を様式化した演壇から議長がいるテーブルへかえって行つた。

くつろぎが広間じゆうにひろがった。

日本女はリノリウム敷の通路を隔て左側の坐席にいる四十ばかりの太い拇指をした男にきいた。

——彼女の演説、長うござんしたか？

——我々ソヴェトの人間は短く話するのが得手でないんでね。

そう云って笑った。それから真面目につけ加えた。

——五カ年計画そのものが小さい仕事じゃないからね！

それは本当だ。うしろでこんな囁き声がする。

——どうしたの！ お前さんたら。

——帽子見に行ったもんだから……

三月八日、CCCPの工場で婦人労働者は毎年一時間早く職場を引き上げる。

ベルを鳴らしながら議長が立ち上った。細い年齢のあらわれてる透る声で報告した。

——何々区コムソモール委員会代表タワースチ・イリンスカヤ。

さかなな拍手に迎えられて演壇へ出てきたのは二十二三の緑色ジャケットと純白なカラーのコムソモールカだ。が、然しこれは又なんと高速度演説！ ちらりちらり上眼で聴衆を見ながら一分間息もつかぬ女声の速射砲。農婦と工場労働婦人の結合のため、我々コムソモールは全力をつくすであろう！ ひよいと片脰あげて一段高い演壇から降り、舞台の奥へ戻ってしまった。湧きおこるインターナショナル。

こまかく折畳んだ紙片が肩越しに順ぐり送られてきた。最前列の女が席を立ってそれを

舞台の上、演壇の下に出されてる投書受箱へ入れてきた。

——タワースチ！ 今夜盛大な第十回世界無産婦人デーの夕を持つことは実に愉快であります。何々区ソヴェトの心からの歓びを諸君に伝える為私は代表としてここに送られたのであります。（さかな拍手）

マイクロフォンへ真正面に顔を向け一言一言はつきりしゃべってるのは、小肥りの老けたヴォロシロフみたいな黒いトルストフカの男だ。

——この愉快的な夜、名誉ある勤労婦人に向って不愉快なことを話すのは不本意であります。しかし、タワースチ！ ソヴェト五カ年計画を完成するために、我々はまだ自己批判すべき多くのものを持つている。今ここに集っている婦人の中にはおそらく数百人の活潑な突撃隊員があるだろう。数十人の活動的な代表員があるであろう。それらの階級的良心ある勤労婦人がプロレタリア革命の意味を真に理解し、偉大な助力をプロレタリア国家に捧げていることは疑いない。我々は工場において、各々の職場において実践のうちに経験しているところであります。（拍手）

ところで、都会はそういう有様だが農村ではどうでありましょうか？ 五カ年計画において最も重大な役割をもつ集団農場の組織について農村婦人がどんな役目を果しているか

を見ると、遺憾ながら、百パーセント満足とは云えない。私がこの間田舎へ行ったら、昔なじみの女が出てきて、丁寧な昔風のお辞儀をして云うことには（話の巧いソヴェト員は百姓女のこわいろをつかった。）「タワーリシチ・グレボフ。集団農場^{コルホーズ}へ入ると、赤坊もやっぱり牛みたいに共有されるって本当かね？」

ドツと云う満場の笑い。「なおいじやねえか！」と云う声がした。又それで笑う。

——ソラ！ 諸君はそうやって笑う。だがそれは一部に今なお信ずべからざる事実としてある事実なんだ。又ある村では一致して集団農場に入ること拒絶した。何故か？ 集団農場に入ると女はみんな髪を切らなけりやならず、夜は大きな大きな一枚の布団があつて皆がその下へ入って寝なけりやならないんだと坊主が話した。それで不幸な農村婦人はすつかりびつくりしちやつた。

聴衆は手を叩く……笑う。笑う。

——諸君！ しかし、農村におけるこんな反革命分子の跋扈^{ばつこ}および無智は放置すべきだろうか？ タワーリシチ！ 農村は右傾派がそれを理解したように都会によって搾取さるべき植民地ではない。都会の工業生産と断然結合すべき、社会主義的生産に欠くべからざる工業原料生産の核心なのだ。

拍手！ 熱心な拍手。もう聴衆は一人も笑っていない。

日本女は心に一種のおどろきを感じつつあたりの顔々を眺めまわした。どうだ、この気の揃いようは！ 演壇に吸いよせられ非常にいきいき反応しつつもう始つて三時間近くなるだろう演説をきいてるのは、いわゆる自覚ある労働者、三月八日の女主人、労働婦人及赤ネクタイをつけた彼等の前衛的後継者たちばかりではない。

細い亜麻色のお下髪を小さい背中にとらして、水色縞の粗末なフランネル服を着ている少女はずつと日本女の右隣に坐っている。しずかに行儀よく坐つて話をきき、あまり数字ばかりマイクロフォンから鳴り響いた五カ年計画の話の時は右手をフランネル服のポケットにさし入れ何か粒々したものを掌へ、それから口へそつと入れた。

咳がしたくなる。少女は彼女のまだ性別定かならぬ喉笛のむず痒さで演説の邪魔をしてはならないと知つてゐる。細い手の指をかためて口を押えて用心深くやつてゐる。

この明かに未組織な少女（ピオニエールではない）の伴れは祖母さんだ。生れてから婦人帽というものは頭にのつけずにきた、そして、自分の家の台所でか他人の家の床の上でか手と足とで働きつづけてきたという風な祖母さんだ。両眼を細め、片腕を肱ごと前列の椅子の背へもたせかけ舞台を見つめて話をきいてゐる皺深い横顔の輝きを見てくれ。CC

CPが凡そ百三十万のクラブ員の上に投げているこれは光の一片である。

革命第十三年にあるCCCPで、組合員千二十八万人をもつ職業組合は、本質に於て社会主義的生産労働力統制、およびプロレタリア文化建設のために働いている。CCCPじゆう数千の勤労者クラブは職業組合文化部の仕事だ。もと、クラブは会員組織だった。クラブを持つてゐる工場又はその生産別職業組合に属するものだけ入れた。ところが、それでは一つ不便が起つた。ソヴェトはプロレタリアートの国ではあるが、彼等のモスクワは社会主義都市計画によつて建てられてはいない。昔々モスクワ大公が金糸の刺繍でガワガワな袍の裾を引きずりながら、髯の長い人民を指揮してこしらえた中世紀的様式の城壁がある市だ。^{ゴロド}現代CCCPの勤労者が生産に従事し新しい生活様式をつくりつつある工場、クラブと、住んで、そこで石油コンロを燃しているであろう家とが時によるとモスクワの両端に飛びはなれてゐる場合がある。家へ歸つてシチ（キャベジ入スープ）を食つて、さてまた市のあつちの端まで、たとえば労働者新聞で今朝読み工場では一時間の昼休みに職場委員がそのために集つた「生産経済計画」^{プロフィンプラン}の演説をききに行く気になるだろうか。「よき労働はよき休養を必要とする」休養の合理化として、クラブはその所在区の市民をも吸収することになつたのである。

だから今夜、クラブ音楽部員は活潑な行進曲を奏し、

ラズドゥワ

一、二！

ラズドゥワ

一、二！

何々区ピオニエール分隊がどつしり重い金モールの分隊旗を先頭にクフミンストルヴ・

クラブの広間を行進して来た。

右、左！

右、左、止れ！

分列。中央から十二三歳のピオニエール少女がつかつかと演壇にのぼった。茶色の演壇上の赤い襟飾り、しまつて惻口そうな顔、房々したオカツパ。

——何々区ピオニエール分隊から、世界無産婦人デーへの熱心な挨拶を！

澄んで打つような少女の声だ。続いて全分隊一斉に声を揃えて、

——世界無産婦人デー、万歳！！

後の方バルコンの下の方席では我知らず立ち上つて大ニコニコで舞台へ向つて拍手を送っている一団がある。

ピオニエール分隊が再び行進曲によつて去り、区婦人代表員がクラブへ記念品としてレ

ーニンの肖像画を贈呈し終ると、議長が自席で立ち上った。

——タワースィチ、これで今夜私のところに記名表の来ているだけの演説は終わりました。誰かもつと話したい人はありませんか？

数百の聴衆、シーンとしている。二秒ほど経って若い男の声が叫んだ。

ニエート
——ない！

つり出されて今度は矢継早にそこここで急いで、

ニエート
——ない！

ニエート
——ない！

日本女の隣の拇指の太い男は、愉快そうな笑顔だ。同感してるのである。CCCP労働青年の気分に。

——では、これから休憩二十五分。すぐ芝居にうつるが賛成ですか。

すごい拍手だ。拍手の音が細そりした老年の婦人議長を舞台の方へふきとばした。

日本女のまわりは完全に陽気な祭のさわぎだ。

——ナターシャ！ ナターシャ！ 早くこつちへおいでったら。

——ミーチャ、どこ？

——見なかった？ あっちへ場所見つけたってさ。

立つ。手招きする。遠くと遠くで何か合図しあつてゐる。

——どいてくれ！ ホラ！ ホラ！

クラブの監督がこみ合う尻や背中をかきわけてコムソモールに片棒かつがせ長いベンチをかつぎこんできた。

——どこへ？

——ここ、此処！

第一列の前へさらに補助席だ。たちまち、舞台横の開いた扉の辺に幾重にもかたまつていた若い男女がそれに向つて雪崩^{なだ}れ、素早く腰をおちつけた者が三四人ある。

四十を越した薄色の髪 of 監督はあわてて手をふりながら遮った。

——タワ—リシチ！ ここへ坐つちやいけない。ここへは委員が来るんだ。そのために入れたんだ。

——どんな委員さ！

——本当にここは空けとかなけりやならないんだ。

——おい。

背広上衣の下ヘルバーシカを着た一人が仲間をうながした。

——立てよ。

若い男二人は立つてしまったが、日本女のすぐ前へ腰をかけた女はそのままベンチのよりかかりに背中をおつつけて動かず、扉の方へ盛に手招きしている。そっちに、ズボンのポケットへ手を入れた伴れの男がよりかかつて立っている。

——どうして？ おいでよ、よ！

捲毛のおちている首筋を、よ、よ！ と強く動かしつつ呼んでる。男は黙ってイヤイヤしていたが、女があまり云うとベンチのところへきて、低い声で然しきっぱり云った。

——止めろよ、工合がわるいや。

——どうして？

下から男を見上げ、女がまわりによく聞えるような鼻声で云った。

——もし委員がきたらそのときどけばいいじゃないの、折角芝居見るのに！

男は、「ブジョンヌイ行進曲」を口笛に吹き、どっかバルコンの方を見ていたが、やがて、

——お前ここに坐つといで、じゃ。——今日は女の日だから女ならいいだろ！

元の扉のところへ戻ってしまった。女は一寸膨れ、手提袋を出して鏡に自分の顔をうつした。その鏡にはヒビがいつている。

日本女のすぐ後に、小さいピオニエル少女が二人で一つの椅子をかついでやってきた。そして赤い襟飾を並べ、そこへかけ合つた。日本女はピオニエル力に訊いた。

——今夜誰が芝居やるの？

——知らないわ。

もう一人の小さい方が、

——トラム。

と答えた。

——どうして知ってるのお前？

これは知らないと云つた方のピオニエル力だ。

——張り紙よんだよ……

トラム（劇場労働青年）はモスクワとレニングラードにある純粋に労働者出身の劇団である。団員はみんな若いコムソモールで、共同経済と嚴重な規約の下に階級的な集團生活

をやっている。そこへ加入するには必ずある一定の期間実際生産労働に従事した者でなければならぬのである。レーニングラード・トラムは自身の劇場をもっている。モスクワでトラムは各クラブをまわり、彼等のリアリスティックな芸術表現で、ソヴェト勤労者が彼等の新文化建設の途上多くもっている今日の問題を批判している。

——何ていう脚本やるの？

日本女の間二人のピオニール少女はきつぱり返事した。

——私達も知らないんです。

『労働者と芸術』。モスクワでそういう新聞が発行されている。職場の勤労者たちはどんな芸術を要求しているか、勤労者の国CCCPにどんな新芸術をつくって行くべきか、実際的ないろんな問題をとりあつかう。いつか、表が出ていた。

割引切符平均価格。

（ソヴェトの勤労者はめいめいの属す職業組合を通じて各劇場の割引切符を貰う）。

エム・オー・エス・ペー・エス劇場

（モスクワ地方職業組合ソヴェトの劇場）九十二・五カペイキ

革命劇場

六十八カペイキ

諷刺座

九十六・六カペイキ

コルシユ劇場

一ルーブル十一カペイキ

オペラ

一ルーブル二十四カペイキ

メーデーの翌日、モスクワじゅうの劇場は全職業組合の無料観劇日だ。しかし「大体云つてソヴェトはまだ理想的なプロレタリアートの劇場を持っていると誇ることはできぬ」。労働者と芸術の記者は書いている。「劇場の建物が古く、少人数しか収容せず、従つて経営費の負担＝切符が一人あて高くなる。勘定して見よう、では五人家内の勤労者の家庭が一晩の観劇にいくらいるか。職業組合ソヴェト劇場へゆくでしょう。

九十二・五カペイキ 切符代

二十カペイキ 電車賃往復

十カペイキ プログラム

芝居は七時半から始つて十一時すぎ終る。モスクワ人は正^{アペード}餐を午後の五時すぎ、つとめ先から帰つてたべる。寝るまで、せめて茶とソーセイジののつかったパン位は食べたい。故に、

五十カペイキ

飲食費

計 一ルーブル七十二・五カペイキ

五人だとハルーブリ六十二・五カペイキ。エム・オー・エス・パー・エス劇場がどんなによい上演目録をもつてたとしてもそうちよいちは行けないではないか。ソヴェトには少くとも一時に五千人から一万入れる劇場が必要だ。我々はアメリカの抜目ない興行主のやり口をソヴェト式に転用しなければならないのだ。」

最近、五カ年計画の文化事業の一つとして劇場組織の大変革が声明された。CCC Pの全劇場を人民文化委員会の芸術部、プロフソユーズ職業組合、コルホーズ集団農場、ツェントル中央部の完全な共同管理の下におくこと。劇場中心を、生産労働区域に移動さすこと。

これは、ソヴェトにおけるプロレタリア芸術の発展に向つての目覚ましい一飛躍である。

コムソモールカのタマールが思案にあまつたようにして椅子にかけ、コムソモールのミーチャに訊いている。

——ねえミーチャ、コムソモールカは子供を生んじやいけないんだろうか？

ミーチャは菜ツ葉ズボンに年中縞の運動シャツを着てる若い工場労働者だ。ウダールニク突撃隊員だ。

——なアんだい！　まるでルナチャルスキーがきいた通りの質問だね。コムソモールカは間違ひなく子供を産んでいいんだよ！　しっかりした次の交代者スメンバーをこしらえるに、コムソモールは子供を産まなくちやならないんだ。

——私はそう思つてゐる。けれどフェー ज्याの考えは違ふのよ。

——ふーむ。どう？

——フェー ज्याは今朝私に云つた。赤坊だの、おしめだの、家庭だのつて時代おくれの俗人趣味だ。俺はいやだ、つて……

ミーチャは手に持つてた針金の束でポンポン自分の脛をたたいた。（彼は彼等が棲んでゐるこの借室ヘラジオを引こうとしてるところである。）

——じゃ何かい、フェー ज्याは……馬鹿らしい！　お前達んところにはこうやってちやんと独立した室があつて、職業があつて、しかも工場にあんないヤースリ（托児所）があるのに——。安心しといで。俺が云つてやるから……フェー ज्याは間違つてゐる！　だがね、

單純な困惑を現わしてミーチャは頭を掻いた。

——畜生、俺がフェー ज्याぐらい言葉の数知つてたらな！

フエーじヤは、書類入靴をそこへ放り出してカーチャを追っかけている。

——ねカーチャ、一寸僕の云うこときいてくれよ！僕は全く君なしで生きるなんて、そんなこと考えられないんだ。

——お前、私の前にはタマールに、タマールの前にはリヨリヤに同じことを云ったじゃないの。

バンドつきカーキ色のコムソモールカの制服をつけて、カーチャは冷静だ。彼女はコムソモール・ヤチエイカの委員である。

——全く場合が違う。ね、カーチャ、考えてくれ、僕たちの周囲に君をおいてどんな知的な女がいる？くだらない俗人女メシチャンカか頓智一つ持ち合わせない職場の棒杭かじゃないか！
——そういう無智な圏境で——カーチャ！

カーチャは腕時計をのぞき、それから放り出されている書類入靴をひろって、フエーじヤにわたしながら云った。

——さ！この報告は今夜七時までに書記局へ行っていないじゃないものよ。……
そして一寸皮肉に笑って、

——「事務は事務ですよ！」

——とてもいい!!

日本女の後で一つ椅子にかたまつてかけている二人のピオニエール少女が顔をほてらして熱心にうなつた。フエー ज्या自身がついさつき、「事務は事務ですよ」と云つたんだ。急に母親が死んで村へかえらなければならない若いコムソモーレツが金の融通を工場委員会へ頼んできたのに、時間が五分過ぎててることを理由にはねつけて、官僚主義を發揮したばかりのところなのだ。

日本女は時計を見た。もう十二時すぎてる。だが演る者も観るものも疲れを知らずユサリともしない。この官僚主義者、新生活の擾乱者の標本が、世界無産婦人デーの夜、トラムによつてどう撲滅されるか、息をつめて観ている。

外でモスクワは濡れた春のビードロ玉だ。夜が更けるにつれ益々すべっこくなつた。モスクワ大学横の暗い坂をタクシーが一台登ろうとしては返つて逆行していた——が、読者よ、そんなにおそくまで平気で子供をほつたらかし無数のソヴェトの母親がクフミンストルワ・クラブのの広間で、芝居に熱中してると早合点してくれるな。CCCPの勤労者ク

ラブは、きっと建物のどつかに「母と子の室」を備えている。そして母が彼女等の芸術的な或は政治的な啓蒙を吸いこんでいる間、それらの母の赤坊は「母と子の室」の小さい白い寝台の上で静かに眠り、かれらの酸素を吸っているのである。

〔一九三一年一月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第九卷」新日本出版社

1980（昭和55）年9月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

底本の親本「宮本百合子全集 第六卷」河出書房

1952（昭和27）年12月発行

初出：「改造」

1931（昭和6）年1月号

※「――」で始まる会話部分は、底本では、折り返し以降も1字下げになっています。

入力：柴田卓治

校正：米田進

2002年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三月八日は女の日だ

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>